

強い NATO なんか要らない：ウクライナ戦争に関するチョムスキーとのインタビュー

C.J. ポリクロニウによるインタビュー、脇浜義明訳、田中一弘補訳 *脚注は訳注
Truthout, 2023年2月23日



A family examines the remains of a Russian tank destroyed at the beginning of the war as the first anniversary of the war between Russia and Ukraine nears, in Bucha, Ukraine, on February 22, 2023. IGNACIO MARIN FERNANDEZ / ANADOLU AGENCY VIA GETTY IMAGES

ウクライナでの戦争はほぼ1年が経過したが、戦闘、苦しみ、破壊に終わりは見えない。実際、米国とドイツがウクライナに戦闘戦車を供給することに合意し、ゼレンスキーが長距離ミサイルと戦闘機を送るよう西側に促す中、戦争の次の段階は血の海になり、何年も続くかもしれない。

ノーム・チョムスキーは、『スルーアウト』誌の独占インタビューで、これはもはや米国と NATO とロシアの戦争であることがますます明白になっていると主張し、ロシアのウクライナ侵攻を考慮すると紛争を交渉で解決するのではなく、NATO を強化する必要があるという考えを批判している。「より強力な NATO を求める人々は、NATO が今何をしているのか、また、NATO がどのように自らを描いているのかを考えた方がいいかもしれません」とチョムスキーは言い、「核戦争へのエスカレーションの段階を上る脅威が高まってい

ます」と警告する。

チョムスキーはマサチューセッツ工科大学言語学・哲学科名誉教授、アリゾナ大学環境・社会正義プログラム言語学桂冠教授、Agnese Nelms Haury Chair を務めており、世界でも引用される学者の一人だ。何百万人もの人々から国内外の宝とみなされる知識人であるチョムスキーは、言語学、政治・社会思想、政治経済、メディア研究、米国の外交政策、世界情勢の分野で 150 以上の本を出版している。最新刊は『正当な権威 (Illegitimate Authority)』。そのほかに『イラク、リビア、アフガニスタン、そして米国権力の脆弱性』(Vijay Prashad と共著、The New Press、2022 年)、『絶壁：新自由主義、パンデミック、そして社会変革の急務 (C.J. Polychroniou と共著、Haymarket Books、2021 年)、『気候危機とグローバル・グリーンニューディール：地球を救う政治経済 (Cobert Pollin, C. J. Polychroniou 共著、Verso2020)』¹などがある。

ポリクロニウ：ウクライナ戦争はほぼ一年になりますが、終わる気配はありません。米国とドイツからさらに新たな兵器供与が行われ、一体 NATO・米国の次のアジェンダは何でしょう？モスクワかロシアの都市をウクライナに爆撃させるつもりでしょうか？

チョムスキー：むしろアジェンダに何がないかを問う方がよいでしょう。答えは簡単で、「もっと悪化」しないうちにこの戦争を止める交渉をするアジェンダがないことです。「もっと悪化」というのは、まずウクライナの破壊から始まります。もっとも、かつて米・英のイラク侵攻や、米軍のベトナム侵攻がもたらした破壊の規模ほどにはならないかもしれません。それでも国連は 2023 年 2 月にウクライナ民間人の死者数を 7000 人と発表しました。これはひどい過小評価です。その 3 倍とすれば、1982 年に米国支援でイスラエルが行ったレバノン侵攻のときのレバノン民間人死者数と同じ水準になります。30 倍とすれば、ロナルド・レーガンの中央アメリカにおける殺戮の規模と同じになります。このような米軍の殺戮例はたくさんあります。

兵器のウクライナへの供与は西側のドクトリンに照らしても、馬鹿げた行為です。ロシアを恐ろしい破壊者として非難するのがドクトリンなのに、西側が恐ろしい破壊兵器を使う犯罪行為を行っているからです。しかも、そういう犯罪行為を正当化する手の込んだ説明をつけます。そんな説明は、ちょっと調査すれば崩れてしまうのは、これまでの米・NATO 侵攻の正当化説明が後でデマであったことが分かった歴史的事実でも明らかです。しかし、そういうものは西側ドクトリン体制の中では「不適切なもの」と扱われます。ジョージ・オーウェルが『動物農園』の序文で書いた（出版本の中で削除された）言葉を引用すると、「一般受けしない思想を沈黙させ、都合の悪い事実を闇に葬ればよいので、わざわざ法律で禁止する必要はない」と、独裁国自由イングランドについて書いたのですが、今の米国にも当て

¹ 『気候危機とグローバル・グリーンニューディール』（早川健治訳、那須里山舎、2021 年）

嵌まります。

「もっと悪化」はウクライナでの悲惨な死亡者数だけではありません。黒海地域の穀物や肥料が全滅して飢えが人々を襲うこと、援助兵器がどんどん高度精密化してく戦争を誘発する恐れがあること、そして恐れレベルでなく確実なことは自然と地球の破壊防止に僅かながら行われていた取り組みが崩れ、戦闘による環境破壊が進行することです。戦争の自然破壊については詳しく述べる必要はないでしょう。

しかし、残念ながらその必要があるのです。戦争で大儲けする兵器産業や化石燃料産業の動きを無視できません。化石燃料で金儲けができるチャンスが転がり込んできたので、これまで形だけでも行ってきた再生可能エネルギーへの取り組みをさっさと捨てて、人殺しに嬉々として協力する企業の動きを無視できません。

もう一つ無視してはならないのは、核戦争や環境破壊の懸念を薄めて抹消するプロパガンダです。最新のピュー研究所の世論調査を見ると、差し迫った危険に関するアンケート項目には核戦争に関する設問はなく、気候変動に関する設問は最後に置かれる軽い扱いでした。共和党員の間で、気候変動への懸念をアンケートで回答したのは、13%にすぎませんでした。

これらの問題は過去に起きた重大問題だが、プロパガンダで国民大衆をうまく抑え込んだので、大衆受けしない思想の一つになっています。

この世論調査は終末時計の針が終末まで90秒の位置に回された時期と一致していました。だから人類にとって心配なのは核戦争と気候変動に加えて、国家とメディアが国民の危機意識を薄め、危機を語らないようにしていることです。民衆の沈黙です。

先ほどの問題に戻りましょう。何故紛争をエスカレートさせて、事態を「もっと悪化」させる政策を遂行するのでしょうか？公的理由は一番最初と同じ、つまりロシアを徹底的に弱体化させることです。しかし、もう少し人道的な理由をあげるリベラル評論もあります。ウクライナを強くして、最終的に交渉段階に入ったときに有利な立場に立たせるためだ、という論理です。しかし、戦闘に負けて、不利な立場に立つことを考慮していないのです。

いずれにせよ、ウクライナに兵器を送ってロシアと闘わせているのです。米国とドイツは新鋭戦車を送り、多分ジェット戦闘機を送って訓練し、ついには米国・NATOの直接参戦の程度が強くなるでしょう。

次段階の手段はもはや秘密でなく、新聞が報道しています。ペンタゴンの特殊部隊「戦闘管制チーム」(CCT)が戦地へ潜入して米軍が供与したガンシップの攻撃を誘導するプログラムの存在を報道しました。また、米国が供与した高性能兵器でウクライナ軍がロシア運を正確に攻撃できるように、標的の位置情報を逐一提供していることも新聞報道されました。「このように米軍が直接的に戦闘関与していることは以前は非公開だった」とコメントを添えています。これは当然ロシアの知るところとなり、いつかロシアが米軍に反撃し、戦争がエスカレートする恐れが十分あります。

そうなると、この戦争はウクライナ人の死体(とロシア人の死体 — 記者)を生み出す米

露戦争だという西側以外の国際社会の見解が正しいことが証明されます。チャス・フリーマン元サウジアラビア大使でさえ、米国はウクライナに最後の一人まで戦わせる対ロシア代理戦争をやらせているように見えると言った。1980年代にも、ソ連のアフガニスタン撤退を仲介した国連交渉官デイゴ・コルドベスとアフガニスタン研究グループのメンバーだったセリグ・ハリソンも、米国はアフガニスタン人を最後の一人まで戦わせる対ロシア代理戦争をやらせたと言いました。

ロシアを弱めるという米国の公式政策はたしかに成功していると言えます。多くのコメンテーターは、巨大の防衛予算のごく一部で、ウクライナを使って、あの地域で唯一の敵対国であるロシアの軍事力をかなり低下させたのは大成果である、と書いています。しかも、米経済の主要セクター、特に化石燃料産業と兵器産業にとっては大当たりの金儲けチャンスになりました。さらに米のヨーロッパ地域に関する地政学的懸念も、一時的かもしれないが、解消しました。ヨーロッパが独自の進路を採用して、ヨーロッパ大陸の繋がりを利して天然資源豊富な東方のロシアと統合するのではなく（大陸派の方針）、NATOの枠内でアメリカの支配下に留まった（大西洋派の方針）からです。

「一時的」と言ったのは、ヨーロッパのドイツを基軸とする複雑な産業システムが、今のように米英の召使的立場での衰退、さらには一定の脱産業に甘んじる態度をいつまで続けるか、不明だからです。

ウクライナとその他の諸国が戦争の破壊的影響をこれ以上受けないために外交交渉による解決の希望はあるのでしょうか。米政府は外交交渉による解決には全然関心がないため、メディアはその方面の調査取材をしません。しかし、ウクライナ社会、米社会、その他のところから、交渉の可能性があるという情報が散発的ですが、流れてきます。様々な種類の徴候がぼつぼつと出ています。昨年3月の時点でも外交努力の可能性があったことは十分に明らかですし、私たちが前にそのことを議論したことがあります。

交渉の余地はまだあるだろうか？ 戦闘が続けば、双方が硬化するのは容易に予測できます。現在、ロシアもウクライナも非妥協的である。これは国際問題では常にあることです。「交渉する政治的意志があれば和平交渉は可能である」と二人のフィンランド人研究者が言ったが、そういう風に状況が展開することはよくあります。二人の研究者は和解へ向かう道筋を滑らかにする措置について段階別に説明しています。政治的意志については、頑なな米政府の一部分に存在することを指摘しています。例えば、統合参謀本部議長と外交問題評議会の上級議員です²。

しかし、今までのところ、「もっと悪化」を避ける道よりはロシアの中傷誹謗と悪魔化の方が盛んで、それも光（善）と闇（悪）の宇宙的闘争という高尚なレトリックで語られます。このレトリックは、米の国際社会における「英雄的行為」にちょっとでも注意を払った人々にはお馴染みの、聞き飽きた常套句です。例えば、カンボジアを叩き潰す政策に国民の支持

² マーク・ミリーとチャールズ・カップチャン。二人はロシア侵攻のときから交渉による解決を提案していた。

を求めたリチャード・ニクソンの言葉を思い出してください。「いざという時に、世界の強国米合衆国が弱々しく無力な巨人のように振る舞ったら、全体主義勢力や無政府主義勢力が世界の自由主義諸国や自由主義機関や制度を脅かすだろう」と言ったのです。

ポリクロニウ: プーチンのウクライナ侵攻が失策だったのは明らかですが、戦争にはいつも誤魔化し、プロパガンダ、嘘がどちらの側からも発せられ、飛び交います。中にはコメントーターの狂気の発言もあります。不幸なことに、それらは一流のメディアで立派な分析論評として発表されるのです。有名新聞に各界著名人の論考や分析を配信するプロジェクト・シンジケートが最近配信した論考は「この戦争ではロシアが敗北し、非武装化するに違いない」という内容のものが多くありました。そのうえで、西側はロシアの敗戦を望んでいるわけではないと主張しているのです。しかし、あなたのように西側はロシアのウクライナ侵攻を引き起こす条件を作った責任があるという考えを幼稚だと非難しています。こういう考えは、ウクライナだけでなく、米国は言うまでもなく、東ヨーロッパやバルト海諸国で有力です。どう反論されますか？

チョムスキー: 「狂気の発言」 — これはロシアだけでなく、味方をしているはずのウクライナやその他の国々にも破壊と荒廃をもたらすものですが — にこだわるのは時間の浪費です。私に関する非難が正しいとするなら、私と同じように歴史的事実に基づいて議論する多くの歴史研究者や多くの知識人や外交官も含めるべきです。その中にはタカ派もいますよ。例えば、ジョージ・ケナン、ブッシュ2世政権時代のタカ派国防長官だったロバート・ゲイツ、レーガン政権時代の駐ロシア大使だったジャック・マトロック、現職のCIA長官など、ロシアについて何でも知っている外交関係のトップ層の人たちも含めるべきです。要するに読み書きができて歴史的事実や外交的事実を受け止めて思考する人は、みんなこのリストに加えられます。

ウクライナ戦争に関しては、過去30年間の歴史を無視してはいけません。ビル・クリントンがミハイル・ゴルバチョフに、統一ドイツのNATO加盟をソ連が承認すればNATOはドイツを越えて東進させないという約束を30年前にしました。その後西側はその約束を破って新たな冷戦を開始し、どんどん東側の国をNATOに入れ、ついにロシアと接するウクライナにまで迫ったという歴史です。

歴史に目を閉じたい人はその自由がありますが、そうすると現在起きていることを理解できないし、「もっと悪化」を避ける見通しを考えることもできません。

ポリクロニウ: ウクライナ戦争に関する人々の心的態度にもう一つ不幸なことがあります。西側のコメントーターや政策立案者が発する人種差別です。ウクライナ難民をヨーロッパ諸国は暖かく受け入れるのはいいことですが、その態度は、迫害、政治不安、紛争、貧困を逃れてヨーロッパへ来るアジア・アフリカの難民(米国の場合は中央アメリカの難民)には

適用されず、入国拒否されます³。また、米国のイラク侵攻とロシアのウクライナ侵攻は質が違うので比較できないという論説にも人種差別が見られます。これはポーランドのネオリベラル知識人アダム・ミクニックが書いた意見です。ついでに言えば、彼はあなたが米のイラク侵攻とロシアのウクライナ侵攻を区別しないのは大罪だと言っています。この種の「知的分析」にどう反論されますか？

チョムスキー：西側の自己防衛的バブルの外の世界では、この人種差別要素が厳しく批判されています。例えば著名なインドの作家・政治活動家のアルンダティ・ロイは「インドではウクライナは何か明確な倫理的使命を訴える問題と受け止められていません。褐色肌や黒色肌の人々が爆撃されたり恐ろしい目にあっても特に問題にならないが、白人がそういう目にあうと事情が異なるようです」と言いました。

私の「大罪」、西側で最も大事にされ、米国に追従する国々も真似をする価値観を破ることに戻しましょう。この価値観に関しては、東ヨーロッパのエリートは一般の人々以上に米国のプロパガンダの影響を受けているようです。ドナルド・ラムズフェルドはそれに基づいて新ヨーロッパと旧ヨーロッパに二分しました。旧ヨーロッパは、国際法や初歩的倫理などの時代遅れの思想に囚われて、米国のイラク侵攻に反対する「悪い奴ら」で、新ヨーロッパは、主として旧ソ連衛星国から成り、古い重荷に囚われない「善い奴ら」なのです。

ポリクロニウ：最後になりますが、ロシアのウクライナ侵攻を受けて、世界はもっと強いNATOを必要としている、交渉による解決なんか要らないと主張する「左翼」知識人がいます。左翼——変革派の一翼を担うと自称する人々が、こともあろうにNATO拡大を支持し、戦争継続を主張するなんて、私には信じられない現象です。この「左翼」の奇妙な姿勢をどう思われますか？

チョムスキー：米国がセルビアを攻撃し、リビアを攻撃し、イラクを侵攻し、アフガニスタンを侵攻したとき、国際的にワルシャワ条約機構を復活させようという左翼の呼びかけはなかったような気がします。それらの侵攻は常に何らかの口実をつけたものだったのですが。

NATO強化を要求する人々は現在のNATOのあり方と今後のあり方について何か考えているのかもしれませんが。実際NATOは変貌し、最新のNATOサミットを見ると、北大西洋からインド・太平洋まで、つまり世界的規模になっています。NATOが米国の対中国戦争計画で重要な役割を果たすことを暗示しています。すでに米国は対中国经济戦争を始めていて、中国の経済的發展を妨害することに懸命（子分の同盟国に強制的に協力させて）です。この経済戦争から軍事衝突（終末戦争）に発展する可能性があります。

³ ブルガリアの大統領は、ウクライナ難民は我々と同じ白人で、テロなどをやるアジアやアフリカ人とは違うと、露骨な人種差別発言をした。

このような話は以前にもしたことがあります。欧州、韓国、日本が、主要市場である中国への技術供与を控えろというワシントンの命令に従うことで生じる深刻な経済的衰退を回避する方法を必死に思索している中で、新たな展開が起きています。

NATOの誇らしげな自画像なんかに興味ありませんが、ひとつ関連した事例を紹介しましょう。最近米海軍が強襲揚陸艦（CHA-9）にUSSファルージャと自慢げに命名したことです。これは、2004年のイラク戦争で米海兵隊がイラクのファルージャを攻撃して大殺戮をやったことを記念して命名したのです。ふつう帝国は自分たちの犯罪を隠蔽するか訳の分からない理屈で言い抜けるものですが、それを自慢げに記念にするのはかなり異常です。

外国人にとってはこんな記念化は承服できません。イラク人ジャーナリストのナビール・サリフはUSSファルージャ就航のとき、「殉教者墓地」として知られるサッカー場のことを書きました⁴。そこには米軍に包囲されたファルージャの人々が米軍の攻撃の犠牲になった女性や子どもなどの死体を埋葬しました。イラクでは運動場でさえ墓場にしなければならない状況なのです。この攻撃では劣化ウランや白リンがファルージャの人々に浴びせられた。サリフの書いたものを引用します。

しかし、米国の蛮行はそれだけにとどまらなかった。その後20年間、劣化ウランと白リンの影響でたくさんの障害赤ちゃんが生まれる悲劇が続いているのに、米海軍は軍艦の一つにその残虐行為を記念してUSSファルージャと命名した。これはまさに米帝国のイラク戦争の性質を象徴している。ファルージャの名前は、何世代にもわたって母親の胎内に植え付けられた白リンによって漂白されたものであり、彼らにとって戦利品なのだ。ファルージャと言う名前を戦艦につける決定をしたことを説明する米帝国の声明は「敵が自分たちが慣れている街の市街戦という有利な条件で決死の覚悟で挑んでくるという不利な状況の中で、海兵隊は見事に勝利した」とあった・・・後に残されたものは家族の喪失、住居の焼け跡、愛する人の笑顔を写した写真の燃え滓であった。そして英国政府と米国政府の処罰されない戦争犯罪者が我々に残したのは、人民から盗むことで仲間意識で繋がった宗派のどうしようもなく腐敗した暫定政府だった。

サリフはヴァルター・ベンヤミンの論文「歴史哲学テーゼ」次の文言を引用しています。「勝者は支配者がひれ伏す者をさらに踏み潰す形で自らの勝ちを連続的に誇示する。」彼は「米国はこの歴史修正主義を通して米国はすでに殺された者をまたもや攻撃する。ベンヤミンは『死者でさえ勝利した敵から攻撃される』と我々に警告した」と我々に警告した。我々の敵は勝利したのです。」と書いています。

⁴ ファルージャ・スポーツ・クラブのサッカー場が第一次ファルージャの闘いで殺された人々（米占領と闘った反乱者や女・子どもを含む民間人）の埋葬地となった。

多くの被害者が証言しているように、それが NATO の本当の姿です。

そういう「真実」を、米軍や NATO の残虐行為をイラク人や彼らと同じ立場にいる褐色人や黒人は知ることが出来るのだろうか？「真実」は、ポーランドの作家が実に米国に従順に流しているプロパガンダです。それは彼だけの意見でなく、多くの同僚コメンテーターも繰り返し流すので、「真実」となってしまうのです。

しかし、公正を期しましょう。米軍が虐殺したとき、米メディアも何が起きているかを報道しました。長くなりますが、米国メディアが国家の悪事を暴く記事を、2018年にオーストラリアのジャーナリストのジョン・メンデューが集めて編集したものを紹介して、私の偏りを正しましょう。

*2004年10月16日：『ワシントン・ポスト』が「イラクのナジャフとサマーラを再び爆撃し、両市の水道と電気を遮断した」と報道。米軍は赤十字とその他の国際救援機関の水、食糧、緊急医療品を民間人に届ける活動を禁止した。

*2004年11月7日：『ニューヨーク・タイムズ』の第一面は米軍主導の連合軍がファルージャで唯一の病院を占領したことで地上作戦が開始されたことを詳細に伝えている。「武装兵士が患者と病院職員を部屋の外へ追い出し、両手を後ろ手に縛りあげて、廊下の床の上に横たわるように命令した。」さらに記事は米軍お病院攻撃の動機を「士官が病院が反乱軍民兵のプロパガンダ武器になっているので、それを封鎖するためだった。ファルージャ総合病院は民間人負傷者の報告を洪水のように流しているからだった」と書いた。ファルージャ市の医療クリニック二軒も米軍の砲撃で破壊された。

*2005年11月：『ニューヨーク・タイムズ』社説は米軍の白リン使用を非難。「白リンを砲弾の中に詰めて、戦場の上空で破裂させ、白い炎が敵の位置を照らし出す。また燃える化学物質の弾を雨あられのように浴びせかける。この化学物質は触れるものすべてを酸素がなくなるまで燃やす。人体内部でも燃焼する。」

*2004年11月初め：雑誌『ネーション』が『ニューヨーク・タイムズ』と同じように米軍の病院攻撃記事を載せた。「米軍はファルージャ・ヘルス・センター攻撃で多数の患者を殺害し、民間人から医療治療、食糧、水の供給を奪っているという報告」に言及した。

*2004年11月：BBCは「水道も電気もない状態で、我々はお互いにバラバラになった・・・道路には女性や子どもの死体が転がっていた。生きている人間は飢えで弱っていた。怪我人は医療機関が破壊されていたのでそのまま死んでいった」と報道した。

*2004年11月14日：『ガーディアン』は「米軍が武装民兵の位置を正確に標的にして民間人を攻撃していないという主張が嘘であることが明らかになり、市内に残っている民間人の恐ろしい状況がこの24時間で明らかになり始めた。・・・市内は何日間も水も電気もなかった」と報道した。

真実を知りたい人よ、これが NATO なんです。

しかし、米と NATO 支持者はもうそんな揚げ足取りはたくさんだ、と言うでしょう。上からの命令では、新ヒトラーであるロシアのウクライナ攻撃を、時々道を踏み外すかもしれないが、基本的に正しくて、イラクの悪の独裁者を追い出して民衆を助けようとした米英の見当違いだが善良な人道的ミッションとを同じに扱うのはもってのほかだ、ということでしょう。この独裁者は、米国が彼の最悪の犯罪を通じて熱心に支援した人物であるが、それは知識人階級にとっては適切なやり方ではありません。

ここでも、もう一度、公正を期しましょう。米国のイラク・ミッションに関して疑問をあげるのは不適切であるということではみんなが一致しているわけでない。最近、ハーバード大学がヒューマン・ライツ・ウォッチ代表のケネス・ロスをケネディ・ロー・スクールのフェローに迎えるのを拒否したことで物議が起きました。関係者の抗議でこの拒否はすぐに撤回されました。ロスは十分に資格があります。そのロスが、イラク侵攻は人道主義的介入かどうかという、有名な人権活動家サマンサ・パワーが司会する討論会で、否定的立場を取ったのです。(カー人権政策センターの代表マイケル・イグナティエフは米の侵攻を人道主義的介入だと言った)

知的世界で頂点に立つ我々は自由で開放的な文化をもち、この事業が人道主義的实践だと言えることさえできるのですから、実に幸運ですね。

自由な知的訓練を受けていない人は、同じようなことがモスクワ大学であったらどう反応するかと、問うかもしれませんね。